

---

# 悪魔の意思

ハシリケンシロウ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

悪魔の意思

### 【Zマーク】

Z9970A

### 【作者名】

ハシルケンシロウ

### 【あらすじ】

少女は竜美に殺してやりたいまでの恨みを抱いていた。そして今、復讐を実行する。

(前書き)

【狂氣コンペ】に参加しておつまむ（^ ^）

Hントリー作品群は、狂氣コンペと記入してサークをかけてくだされると、総てヒットいたします（^ ^）

是非やつてみてください（^ ^）～

少女は機会を窺っている。

自分を酷い目に遭わせたあの女を、更に酷い目に遭わせる機会を。

『許せない……！

人をあんな目に遭わせといて平然と生きてるなんて…』

どうしても許せない。

『あたしを電波で殺してくれたんだ。  
貴様も電波で、……死ね！！』

竜美は携帯電話で友人と話している。

電波は三本立つていて、今日はやけにノイズがひどい。  
声が遠いとかその類ではなく、カラオケボックスでのハウリングの  
ような、かなり耳に障る間高いノイズだ。  
時間に比例して、ノイズが段々ひどくなる。

竜美はこれ以上の通話は不可能であると判断し、  
「ごめん、ケータイ壊れたみたい！  
なんか、ノイズがひどいんだよね！  
もう千秋がなに言つてるのか判らないぐらいだから切るわ…」  
と大声でまくしたてて、一方的に切つてしまつ。

「ううなしか、気分が悪くなってしまった。

考えれば考える程気分は悪くなつてくる。

携帯電話の買い換えを考え始めた矢先、突然聴き覚えのない着信メロディーが流れ始めた。

低音域を中心とする、なんとも不気味なメロディーだ。

不快感が更に上昇していく。

周りを見回すと、全ての視線が自分という一点に集中していた。

自分のポケットから携帯電話を取り出すと、不気味な着信メロディーがイルミネーションを点滅させる電話機と共に、近付いて来る。

竜美には、「こんな曲を落とした覚えが全くな

い。登録している着メロサイトは全て試聴可能だ。

間違つてもこのような、不快感しか与えてくれない曲を落とす筈がない。

百歩譲つて落としてしまったとしても、目的の着信メロディーではないのだから、聴きもせずに削除している筈だ。

不気味なことはまだ続いた。

じわりじわりと音量が大きくなつてているのだ。

周りの自分を見る目が、かなり険しくなつてきている。

携帯電話を開こうとするが、なかなか開かない。

むきになつて開こうとするが、全く開かない。

全身全霊を持つて開こうとするが、まるで、意思を持つているかの

ようにならない。

その間にも、音量は大きくなつていく。

『嫌……、嫌！』

「嫌あああ！」

竜美は携帯電話を道路に投げ捨てた。  
アスファルトに激突していくらか碎けた後、自動車にひかれ、碎け散つてしまつた。

この日は、竜美にとつて厄日なのかもしれない。  
携帯電話の破片がいくらか飛んで来たのだ。  
物凄い速度で飛んで来る破片を避けきれる訳もなく、ほぼ全てを顔面に浴びてしまつた。  
おびただしい数の破片を顔に突き刺したまま、後に崩折れしていく。

竜美が意識を取り戻したのは、まるで抵抗を感じないフカフカなベッドの上だつた。

四方八方、どこを見ても真つ白だ。

余りの生活感の無さに自分の目を疑う。

「病院？」

だが、普通の病院ではなさそうだ。  
余りにも、生活臭がないのだ。

「まさかまさか！」

変な実験所に連れ込まれてて、死ぬような人体実験をされるんじゃ

……」

そんなことは有り得ないとは解つてはいるのだが、考えてしまふほど今日は、運が悪い。

「田は、大丈夫なんだ」

それは、不幸中の幸いなのかもしない。

無数のプラスチックの散弾から失明を間逃れたのだ。

顔中に痛みを感じる。

それは、顔に重傷を負つてていることを意味している。

「あたしの顔、どうなるのかな」

絶望にも似た感情が心の底から沸き上がってきた。

やり場の無い絶望感に打ちひしがれている所に、病室のドアが開く。ドアの向こうには、一組の男女が居た。

「森重竜美さんですね？」

女が確認してくる。

そして、口づけ続けた。

「警視庁捜査一課の岩国です」

手には、開いた警察手帳をかざしている。

確かにそこには【警視庁捜査一課警部若国臯月】と書かれてあつた。  
顔写真も紛れもなく本人だ。

『！！

刑事がなんの用なの！？

あたし、殺されかけたってことなの！？』

「実はですね、あなたの投げ捨てた携帯電話をひいた車が、それが原因でハンドルを取られて、人が大勢いた歩道に突っ込む死亡事故を起こしてしまったんですよ。

ドライバー及び、ひかれた通行人五人は即死でした。

誠にお気の毒だとは思いますが、過失至死傷罪で貴方の身柄を警察病院へ確保させていただきました」

「そんな！

そんなそんな……」

「残念ですが……、これが事実です。

回復を待つて、取り調べを行うことになりますので、宜しくお願ひします」

刑事達は、一方的にそう告げると、病室を去つていった。

訳が解らない。

なぜ「」のようなことになってしまったのか。

「ケータイだ……。」

全部ケー タイが悪いんだ  
.....

それに気付いた竜美は、ハッ当たりしようとポケットに手を入れた。

耳を塞ぎ、激しく頭を振つて髪を振り乱したといひで意識が、  
飛んだ。

意識を取り戻したとき、竜美はベッドの上に居た。

いつもの、全く變わり映えもない、自室のベッドだ。

いつも通りに整然とした、いつも通りの家具の配置の部屋である。それは、平和な朝の訪れを示すものだった……筈だった。

枕元には、携帯電話。

それもまた、見慣れた光景だ。

田覚まし替わりに置いてある、言わば【定位置】だ。

「大丈夫。

顔の痛みもないし、間違い無く夢だったんだから！」

携帯電話を手に取つて開くと、メールの着信を告げていた。開いてみると、画像が一件添付されているだけで、本文は、無い。

『怪しい。

なに、このメールは……』

削除することにした。

夢の中とはいえ、怪しい挙動を示した携帯電話だ。見ないに越したことはない。

「マジで呼び出して、削除を選ぶ。

『！？

拒否ーー？』

いくら削除をクリックしてもヒラー音を発てるだけで全く消える気配がない。

それどころか、夢では開かなかつた電話が、今度は閉じなくなつてしまつている。

「なによなによーー？」

見たくもなかつたが、どうしても液晶画面に田が行つてしまつ。まるで何かに操られているかのように自分の意思を無視して画面を

凝視してしまつのだ。

「見たくない！」

「こんなの見たくないのに……」

カーソルは、勝手に動き始める。

「やめて！」

まあ、「マンドを消し

「開かないで！」

添付ファイルに合わせつて

「お願い……」

……それを開いた。

「やめてえええ！！」

そこにはあつたもの……。

それは、見慣れている筈の人物だつた。

それなのに、服装でしかそれを認識できない。

それほど、変わり果てていた。

その「メールは、この部屋で、カーテンレールから首を吊つた……

……自分。

竜美はまた、意識を飛ばした。

竜美の意識は、もう戻つて来ることは無かつた。  
ただ、ベッドに座つてゐるだけ。  
ただ、鼓動を維持して呼吸をしてゐるだけ。

少女は竜美を中心としたグループ仕打ちによつて自宅のカーテンレールから首を吊つて、既に死亡し、靈体と化していた。

彼女が受けた仕打ちはとても陰湿で、凄惨な物だつた。

私生活の盗聴と盗撮。

更には、それらの録音テープや、盗撮映像を、インターネットの裏

オークションサイトで販売されてしまったのである。

渋谷で芸能事務所からのスカウトを受けたことがあるほどの中の美少女の盗撮映像には、とんでもない額の大金が動いたらしい。

『ふん！

なにが

「あんたはいい金になるから、大丈夫嫌いだけど友達でいてやつたんだ」  
よー』

それは、全てが露見したときに、竜美が少女に対して放った言葉。

凄惨な仕打ちを受けた上に、親友だと信じて疑わなかつた者の口から投げ付けられた言葉の暴力に対する当て付けとして、家に呼び付けていた竜美の目の前で首を吊つた。予め、準備をしておいたのだ。

竜美は、狂つたように暴れて悶え苦しんでいる少女を助けようともせずに、走つてその場から逃げ出した。

『……、死ね！』

これは、少女が最期の力を振り絞つて残した親友だった者に対しての遺言。

靈体となつた後、まよせつたことは、電波を含む電気全般を操る術を身に付ける訓練だつた。

靈体は、対象を良くも悪くも強く思つ」とで、その周囲の状況を自在に操ることが出来る。

それが、【守護する】とこいひ「や、や【祟る】とこいひとに繋がるのだ。

少女の場合は、勿論【祟る】だった。

『あたしを電波で殺してくれたんだ。  
貴様も電波で……、死ね！』

この時点で少女は、電気を操るどころか、電気と同化する術を身に付けていた。

竜美の学校からの帰り道で待ち伏せていると、都合のこいひと、竜美は、電話中だつた。

少女はあつさり電波と同化して、竜美の携帯電話に侵入すること成功した。

『殺してやる！』

ここでは少女は、究極に氣味の悪いオリジナル着信メロディーを作成し、登録。

これを対象として五分後にタイマーをセッティした。

『おつと、音量調節を壊しておかないとね』

全ての準備を整えてから、少女は竜美の耳から脳内に侵入した。

『さあ、いたぶつてやるかー!』

少女の頭にはそれしかない。

人間という生命体は、常に体内に発生している【生体電流】というものを用いて、脳からの指令を体の各部分に伝えている。少女が竜美を自由に操れる資格は、間違い無くあるのだ。

『たつぱり苦しめてあげるね』

脳内に侵入し最初にしたことは、耳鳴りを起こす事だった。案の定竜美は、計画に沿った行動を取っている。

『あたしが誘導してるとも知らずに……。』

ほんと馬鹿だわ。

こんな馬鹿の陰謀にも気付けなかつたなんて……、情けない』

悔しさが込み上げてくる。

少女の竜美に対する恨みが……、増した。

竜美が自爆してくれたお陰で、タイマーが正常に作動してくれた。

場所は天下の往来。

初めは申し訳程度だつた音量が、リミッターを破壊されたことにより、そのスピーカーが持つ限界出力までジワジワと上がっていく。

神経に障る旋律なだけに、周囲からは自分がそこに存在すること自体が犯罪であるかのような、怒りに満ち満ちた視線が飛んで来る。

この瞬間、竜美の脳波が極端に乱れ始めたのを感じ取った。

『やだなに！？

もう気が狂っちゃうの！？

もつとイジメてあげたいのに！…』

不満だ。

この程度で許すことの出来る女ではない。

余りの不満で、自分の気が狂ってしまいそうだ。

少し経つて、竜美が着信メロディーを切るひとつとしたため、加える力に関する信号に対して妨害を入れた。

苛立ち、焦り、恐怖。

様々な感情が竜美の脳内に飛び交っている。

『きやはははは！？

慌てる！

怯えろ！

そして、死ね！…』

次の瞬間、竜美は想定外の行動をとる。

車道に向かつて携帯電話を投げ付けてしまったのだ。

これは予想外だ

どうなつてしまふのか想像もつかない。

『あーもう！

これからがいいとこだつたのに！

ほんとに馬鹿な奴は、気を付けてないとなにしだすか判らないよ！

！』

ここから先は、成り行きに委せるより他にない。

『お願いだから只で済まないでよ！？』

心の底から不幸な出来事を期待する。

自分がこの女を操って、大量虐殺や食人などを行い極刑にもつてい  
く手もあるが、あまり無関係な者を巻き込みすぎるのも考え方だ。  
それに、少女の目的はもつと別な場所にある。

携帯電話はアスファルトに激突していくらか砕け、自動車にひかれ  
て完全に砕けた。

運は少女を見放してはいなかつた。

砕けた破片が竜美に向かつて飛んで来たのだ。

『どうせなら顔だ！』

女の顔。

しかも、確実に可愛い部類に入る、渋谷で、自分に続いてスカウト  
を受けた顔。

思えばこのときだ。

少女が、

「興味ありませんから」

と断つた後に竜美が、

「じゃあ、君でもいいや……」

という言葉から始まるスカウトを受けたとき。

ここから、盗聴、盗撮地獄が始まったような気がする。

少女はこのときの竜美の気持に若干の同情を覚えつつも、生体電流をいじつて、避けに入っていた竜美の顔が破片が来るだらう位置に来たときに、動きを止めた。

『砕けるおおお！－！』

少女の望み通り、竜美の顔は砕けた。

実は竜美の顔が砕けた時、少女は竜美の脳内には居なかつた。カーステレオの電気を頼りに、携帯電話をひいた自動車に憑依していたのである。

その状況に於いて、ハンドル操作を誤らせるのは簡単なことだつた。どこかのガラスなり、バックミラーなり、サイドミラーなりに映り込んでしまえばいいのだ。

『ごめんなさいね。

悪いけど、あたしのために……、死んで！－！』

試しにフロントガラスに映り込んでみると、

「あああああ！」

という抑揚が支離滅裂な悲鳴をあげて、ドライバーの女性はあらぬ方向へとハンドルを切り始めた。

数秒後、自動車は、人が群れ生ず歩道へ突っ込み、塀に激突して爆発炎上。

ドライバーの女性を含む六人が少女の復讐のための人柱となつた。

少女はまた、失神している竜美の脳内へと戻る。

竜美の周りには、様々なサイレンの音が入り乱れていた。

目を閉じたままであるため、視覚による確認は出来ないが、どうやら、救急車、パトカー、消防車といった面子がそれぞれ複数でやってきているようだった。

「大丈夫ですか！？」

激しく体が揺れる。

今後の展開が楽しみになってきた。

一度病院に着いたが、今まで聞いていた声とは違う声が割つて入り、警察病院がどうのと告げて、また移動し始めたようだ。

どうやら、先程の事故に対してもらかの罪に問われ、竜美の身柄が警察に確保されたらしい。

予定外のイレギュラーに見舞われたが、段々と、軌道が修正されていく。

暫くして、少女の視界に光と景色が戻った。

竜美が意識を取り戻したらしい。

脳の活動が活発さを取り戻していく。

程無くして刑事が現れ、

「過失至死傷で警察病院に拘束した」

「もうじき取り調べさせてもらう」と二つ皿を一方的に告げて、病室を去っていく。

『よしよしよしよし!』

うまく理想の展開に持つて行けそうだ。

『さあ、殺すぞおー』

計画は順調に進んでいる。

竜美は明らかにど動搖し、そして、怯えていた。

余りにもひどい動搖のため、【自分が壊して、ありもしない携帯電話】に八つ当たりしようとしてポケットをまさぐり始めている。

『くたばれ——つづ——』

少女は、竜美の触覚をいじり、携帯電話を触っている感覚を右手に伝える……。

「いやああああああ——」

竜美は、恐怖の余り……、失神した。

仕上げは、自分の死に様をこの女にくれてやること。  
ただし、実際にくれてやつたのでは効果が無い。

『あたしが受けた苦しみと屈辱はこんなもんじゃない!』

もつといたぶり、もつと屈辱を『えてやりたいのだ。

少女はまた、竜美の神経を……、いじる。

「うわあああああ——」

『あたしの目的は、あたしを死に追いやった連中に、精神的な【死】を『与えてやる』こと。

ふふふ……。

この女はこの後どんな結末を迎えるのかしらね？

残りまだ三人も居ることだし、ここには「れぐらいにして、早く他の連中を殺しに行かなくちゃね……。

どんな風に狂わせてやるつかなあ。

楽しみだなあ』

目的を果たした少女は満足げな笑みを湛える。

『あは……。  
あはは……。  
あやははははあ……』

狂ったような笑い声をあげ、少女は次なる獲物のもとへ、向かっていぐ。

少女の復讐は、まだ始まったばかりだ……。

E  
N  
D

(後書き)

いまいち狂つて無い氣もしましたが、少女には、出来るだけナチュラルに狂つて頂きました( ^ \_ ^ ; )

最後までお付き合ひて頂きました、ありがとうございました( ^ \_ ^ )

ではでは( ^ \_ ^ ) /

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9970a/>

---

悪魔の意思

2010年11月28日06時50分発行